

【季節と生活】

この五月号が出る時、桜前線は日本列島を全部通過して行き、南の方から、緑の葉がたくましく伸び、色合いも濃くなっていく頃でしょうか。みなさまのところはどんな季節でしょうか。

生活教育では、季節にリアルタイムで合った教育を重視しています。〈季節を超えた教育〉も同時に重視していることが、生活教育をわかりにくくしてはいますが、〈季節に合った教育〉が土台になれば〈季節を超えた教育〉は実感のない味気ないものになります。

日本国憲法、教育基本法の具体化を図った、生活教育と共鳴する文部省『学習指導要領 一般編（試案）昭和二十二年度』は、冒頭で戦前の画一的な教育を批判して、「四月のはじめには、どこでも桜の花のことをおしえるように定められたために、あるところでは花はとつくに散ってしまったのに、それをおしえなくてはならぬ」かつたことを克服すべき課題にあげています。

学校生活やカリキュラムに季節感があふれている

生活教育 キーワード

かどうかは、教育の在り方全体をはかる体温計のような基準になります。

現行の『保育所保育指針』や『学習指導要領』を見ると、保育所では「保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考

慮」するとあつて、季節がカリキュラム編成原理として重視されています（幼稚園も同様）。ところが小学校になると、本文では明言されなくなり（理科では強調）、高校になると定時制で「授業日数の季節的配分」がいわれるぐらいで季節原則はなくなっています。

心の中に〈歳時記〉を持ち、同時にそれにとらわれず、目の前の季節の〈実景〉を感じられる大人になりたいものです。

（研究部・加藤聡二）

参考文献

- ①宮坂静生『季節の誕生』（岩波新書）岩波書店、二〇〇九年、iv ページ、一六一ページ。
- ②ルートヴィヒ・クラゲス（杉浦實訳）『リズムの本質』みすず書房、一九七一年（新装版二〇〇六年）、原著一九三三年。うぶすな書院より新訳あり（『リズムの本質』について、二〇二二年）。